

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に【22】

キケロ『義務論』より — 印欧語の比較と母音交替 —

秋山 学

今月はキケロ『義務論』からテキストを選んでみることにしましょう。

原文 Gradūs autem plūrēs sunt societātis hominum. Ut enim ab illā infīnitā discēdātur, propior est ēiusdem gentis, nātiōnis, linguae quā maximē hominēs coniunguntur; interius etiam est ēiusdem esse cīvitātis: multa enim sunt cīvibus inter sē commūnia, forum, fāna, porticūs, viae, lēgēs, iūra, iūdicia, suffrāgia, consuētūdinēs praeterea et familiāritātēs multisque cum multis rēs ratiōnēsque contractae. Altior vērō colligātiō est societātis propinquōrum; ab illā enim immensā societāte hūmāni generis in exiguum angustumque concluditur. — *De officiis*, I, XVII, 53.

仏訳 Il y a plusieurs niveaux de la société humaine. A partir en effet de cette société infinie dont on vient de parler, il existe, plus particulière, la société de la même race, de la même nation, de la même langue qui, elle surtout, réunit les hommes, mais le lien est plus intime encore d'appartenir à la même cité. Beaucoup de choses en effet sont communes entre eux aux concitoyens: le forum, les temples, les portiques, les rues, les lois, le droit, la justice, les votes, les relations aussi et les amitiés, et pour un grand nombre tous les contrats d'affaires. Plus restreint en vérité est le lien de la société familiale, car partant de la société immense du genre humain, c'est à ce noyau étroit qu'on aboutit.

訳 さて人間社会には、複数の段階がある。無限に広い全人類の社会はさておき、より緊密なのは、同じ民族、同じ部族に属することであるが、同じ言語に属することは、人々が最も強い絆で結ばれるあり方である。同じ都市国家に属することは、さらにより内的な結びつきである。同じ市民であれば、中央広場・神殿・回廊・街路・法律・権利・裁判・選挙など多くが、互いにとって共通のものであるが、それだけでなく、習慣や友情は、大勢の人々にとって、多数者との取り決めまた関係として成立するものだからである。しかし親族社会の結びつきは、さらに深いものである。というのもこれは、無限なる人類社会から、小さく狭いものへと閉ざされているからである。

今回注目したいのは、第二文目前半の節 “Ut enim ab illā infīnitā discēdātur” の定動詞となっている discēdō (不定詞は discēdere) という動詞についてです。discēdātur は、その接続法現在受動相・3人称単数形で、ここでは前置詞 ab とともに用いられ、「～を別にしておく」といった意味を表しています。この動詞は dis+cēdō と分解できます。

まず前綴の dis- ですが、discēdō のように動詞に冠せられるほか、形容詞や名詞などの前に冠せられ、語彙要素として単独で辞書の見出し語となる場合には “dis-/di-” として取り出されます。次に続く語彙要素が c, p, q, s, t で始まる場合には、discēdō の場合のように dis- となり、d, g, l, m, n, r, v で始まる場合には (ほとんど) di- となります。また次に f で始まる語彙要素が続く場合には dif- という綴りになります。最後のケースとしては、difficilis (「難しい」; > 仏語 difficile) などが思い浮かびますね。

これに対し、動詞本体である cēdō (不定詞は cēdere) は、単独では「退く、譲る」といった意味を持ちます。仏語にも、同様の意味をもつ動詞 céder として残っていますが、英語の cede になると「譲渡する」といった古めかしい語感が伴うようですね。

この cēdō の基幹部分となる動詞語根として、辞書 A によりますと、cad- を取り出すことができるとされています (cad- の意味は「落ちる」)。この辞書によると、cēdō という形になる前に、*ce-cadō のような、強調の意味を含む重字 (疊音) を伴った語形が想定できるとされます。一方辞書 B によりますと、cēdō はギリシア語の ὁδός (hodos:「道」) やサンスクリットの √sad (「座る、沈む」) と同根であるとされています。

一方、ラテン語には cadō (「落ちる」; 不定詞 cadere) という自動詞が存在し、この動詞からは動詞語根 cad- そのものを取り出すことができます。この動詞は、例えば前綴 ob (前置詞としても用いられる) を冠し、綴りを変えながら、合成動詞 occidō (「倒れる」; 不定詞 occidere) を形成します。この際、単独では cadō の中に a 音が現れているのに対し、合成動詞では弱体化して i 音となり occidō となっていることに注目しましょう。この現象は、「母音交替」(ドイツ語で Ablaut) の一種と見なすことが可能で、広く印欧語全般に認められるとともに、サンスクリットでは規則性を伴って現れます。

なおラテン語には他に動詞 caedō (「倒す」) が存在し、cadō の他動詞の位置にあるように思えますし、この動詞を基幹として occidō (「押し倒す」) のような合成動詞が形成されます。この他動詞には ae 音と i 音の交替が認められますね。ただ上の辞書 B では、caedō にはサンスクリット動詞 √khid (「裂く」) との同根性が指摘されるのに対し、cadō にはサンスクリット動詞 √sad (「倒れる」) が同根語として引かれています。仏語や英語には、ラテン語の語源をほぼ明確に指摘できるのに対して、印欧祖語レベルでの語源探究に際しては、まだ様々な説が見られるようです。

(あきやま・まなぶ)